
強く強く

紗夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

儚く強く

【Nコード】

N6284C

【作者名】

紗夜

【あらすじ】

小学生にして訳ありで一人暮らしをしていた一人の少年。そんな彼は、暗闇の中にも光を見つける。友達という、光を…。

第一話 (前書き)

中学から高校にかけての物語を書きたいと思います。完結するか分かりませんが、文章もかなり拙いと思います。それでも読んでいただける方は、よろしくお願いしますm(_____)m

第一話

うんざりだった。

この世の中も。

周りの人間も。

消えて無くなりたいと、何度願っただろうか。

その度に、それはいけないと思った。

家族の為にも、生きようと誓った。

生きなければ、いけないと…。

第一話

季節は春。

とは言っても、まだ初春の肌寒い時期。

俺は寒がりなのもあり、Ｔシャツ、Ｙシャツ、薄めのカーディガンの上に、更に分厚いカーディガンを重ね着していた。

たった今、卒業式用のブレザーを制服店から借りて来たところだ。

3月14日。

それが卒業式の日。

今のところ晴れの予定。

…桜は咲くのかな。

ピンポーン

ふと、間抜けな呼び鈴の音がする。

時刻は午後5時23分。

家を出たのが4時半、制服店まで15分程。

まるで俺が帰って来るの見計らったような時間に来るは、あいつ以外にいない。

今来た廊下をまた戻り、玄関に着く。

「成瀬^{なるせ}です。誰ですか？」

そこに誰が立っているか分かり切ってはいるが、念のためだ。

「俺」

「だから誰ですか？」

「…石崎 亮介^{いしざき りょうすけ}」

名前を確認し、鍵を開けてやる。

訪問者はドアを開け、拗ねた顔で入って来た。

「誰だか分かって名前聞いたろ」

声まで拗ねている。

「一応。無用心だから」

「…そうかなあ」

まだ不満足らしいが、面倒なので無視。奥に歩く。

「なあ、^{なつめ}棗」

「なんだよ？」

「冷たい…」

「いつもの事だろ」

冷たくあしらうと、また拗ねた顔をする。

「その“いつも”が続けばいいけどなあ」

「ははっ、何だそりゃ」

「だってお前、卒業だぜ？ 今日で6日。カウントダウンは始まっている！」

妙に凄みの利いた声で言うので、笑いが込み上げてきた。

「同じ中学じゃん！」

「でもよお……」と言葉を濁す亮介。

そして、気まずそうに話だす。

「なあ、その、お前のお父さんは……卒業式、帰って来んのか？」

「来ない」

「じゃあ入学式は……」

「来ねえよ、一生。今頃、どっかで余生楽しんでんじゃねえの？」
「……………」

亮介は黙り込む。

「……悪い。心配してくれたんだろ？」

「……いや、ね。俺も悪かったよ。命日、明日だっけ…。ストレス溜め込む時期だよなあ」

命日。母と姉の、命日。

3月7日。

思いだしたくもない、忌々しい記憶が頭を掠める。

「嫌な事思い出させんなよ…」

「うん、ごめん…」

それでも俺はなんとなく、亮介の気兼ねしないストレートな話し方が好きだった。

亮介は幼稚園から一緒に、いわゆる幼なじみ。

小学校3年の時に、俺の家族がいなくなったことを知っている数少ない人物の1人だ。

「亮介、俺の家族のことは…」 「分かってる。誰にも言わないよ」

「サンキュ…」

「お前のペースで、お前が信じられる奴だけに話せばいいさ」

「…ああ」

それからその話は一切出さずに、他愛もない話に盛り上がって、時刻は7時を回った。

再び間抜けな呼び鈴が鳴る。

「何、誰？」

「さあ……」

亮介の質問に、心当たりの無い俺は歯切れの悪い返事をした。

玄関まで行って、声を掛ける。

「誰ですか？」

「望^{のぞみ}」

端的な答え。でも、誰だか分かる。

「ちょっと待って」

すぐに鍵を開け、招き入れる。

望こと三森^{みつものぞみ} 望は玄関に亮介の靴を発見したらしい。

「あれ？誰のだろ…」

と、何回も疑問符を浮かべている。

「…！分かったあ、亮介だ！」

大声を出して駆け出す三森を、いつものペースで歩く俺が追う。

リビングから賑やかな会話が聞こえ始めた。

「三森じゃん。何しに来たの？」

「勉強教えてもらおっかな、って」

「棗、頭いーからな」

「亮介はバカだよなー。“ナツメ”って書けないでしょ。“棗”って書くんだよ」

「…知ってるよ！」

「ウツソだあ〜」

さすが三森。自他共に認めるハイテンションガール。場が一気に盛り上がった。

「勉強くらい自分でやれよ」

会話に加わる俺。

「酷い！ 棗、冷たいよお！」

「いつもの事だろ」

「あ、俺も言われた」

「亮介うるさい」

「…酷いのお前じゃね？」

結局、勉強を教える事になり、もう終わらせた宿題を2回やる羽目になった。

「もう9時なるけど。いつ帰んの？ お前らは」

ご飯も風呂もまだのハズなのに、いつまでも家に居られると困る。

「じゃあ、俺帰るよ」

「私はもうちよつと…」

『お前も帰れ』

「ハモンなくても…」

午後9時4分。

平穏を取り戻した部屋は、清々しくもあり、寂しくもあった。

風呂に入り、出る。

濡れた髪など気にせず、カーペットに寝転ぶ。

「…明日は命日か」

亮介に言われた事を、声に出して再確認する。

気まぐれで独り言を言う癖がついてしまったのは、もう3年目になる一人暮らしのせいだろう。

そんな事を考えて、明日の準備をした後、床に就いた。

「ふわああ…」

また、新しい朝を迎える。肌寒い朝に慣れる事はなく、この季節は嫌いなままだ。

あの事故の日から…。

第二話

俺には、事故の記憶が無い。

だからと言って、悲しくない訳ない。

それまでの記憶ならしつかりとある。

家族がいないのだ。

自分の知らない時に、家族がいなくなってしまったのだ。

いや、正確には一人いる。

どうしようもない、今生きているかも分からない、親父が。

第二話

寝巻きから普段着に着替えて、朝飯の準備に向かう。

飯を作るのは結構得意で、小学生のそれとはレベルが違うと思う。
これは自惚れではなく、実際に亮介や望に言われた事だ。

でも、命日にはいつも手早く済ませる習慣があるので、例の如く朝はトースト1枚とココア1杯。

「今年も桃の花にしようかな…」

桃の花

母も姉も好きだった花。

季節もピッタリだし、いつ見ても綺麗だと思える。

まあ事故が影響してるんだろうけど。

「…いつてきます」

誰かが居るはずもない部屋に、挨拶を告げる。

「あゝあ、今日は棄休みかあ…」

さつきから5回目の発言だぞ。そろそろ諦める望。

「…ホント好きなんだな。棄の事」

つい口をついて出た言葉に望は…

「ええっ！そんな事…、いや、あるけど！でも声おっきいよお！亮介え！」

「……………」

うん。いいリアクション。

でもね。皆気付いてますよ？あなたが橐を好きなのは。

「ああ！もうバレちゃうじゃんかあ！」

「……………」

だからバレてますって。
黙っておきますが。

「いやあああ！」
「うつせーよ！」

そろそろ耐えらんねえぞ、オイ！

「だつてえ……………」

「望はいちいち反応デケェんだよ！」

「ふーんっだ！亮介には分かんないもんねー！」

「ハイハイ……」

俺のマンションから徒歩で20分程の所に、母と姉の眠る霊園はある。

この広い霊園の中、墓は奥の方なので、辿り着くにも一苦労だ。

「……また今年も来たよ。母さん、姉貴」

「待つててな。今綺麗にしてやつから……」

毎年、ここへ来て最初にする事が、墓の掃除。
3年目となるともう恒例になった。

手早く終了。

花を添える。もちろん桃の花。

1年間に起きたことを、報告する。

「……じゃあな、また来年。必ず来るよ」

別れを告げる。あっさりしてるように見えるかもしれないが、これ以上ここに居ると泣いてしまいそうになってしまふ。

「今日の晩飯は何かな…」

気を反らすフリをする俺が更に情けなく思える。

でも、今はこうする事しかできない。

今だけは…。

第三話

「ふわぁ……」

はつきり言って、卒業式はたるい。

しかも、去年の卒業生は男子まで大泣きする程感動的だったのに、今年、俺らの代は泣いてる奴がいない位だ。

まるで、泣いてる方がおかしいみたいに。

「……………です。……………は……………なので……………」

校長の話が始まって15分経過。

一向に止まる事の無さそうな無駄話は、俺の耳を通り過ぎる。

悲しい事ではあるが、この学校に未練とかそんなのは一切無くて。

もう少し、溶け込んだときゃ良かったか。

でも別に溶け込んでない訳じゃ…。

ぼんやりと話をやり過ごして30分が経とうとした時、やっと校長

が長い長い話を終えた。

卒業証書授与式とかいうのも終わって、後は帰るだけか。

って時に…

「棗！今からお前ん家で打ち上げだ！」

また訳の分からん事を…。

「亮介、お前はバカか？何の打ち上げだよ」

「卒業式の」

「普通、感動的なモノなんだから、盛り上がって騒ぐなんて…」

「全然感動的じゃないからいいでしょ」

結局、強引に家へ、亮介と何故か望まで行く事に。

その途中の帰り道

「望？」

通りすがった男女4人の1人の女子が私に話し掛けて来た。

「由^ゆ宇…？」

それは、はつきりと見覚えのある顔で。

「やっぱり！望じゃーん！」

「久しぶりー！」

2人できやあきやあ言っていると、不思議そうに訊ねてくる棗。

「知り合い？」

そうだ！紹介しなきゃ！

「あのね！前の塾で一緒だった友達！」

「ふうん…」

「でね、神^{こう}山^{やま}由宇ちゃんデス！」

由宇が頭を下げるのを見て、棗も軽く下げる。

「あー…、神山さん？」

「はい」

「南中？」

「え？」

南中とは、私達が進学する中学校の名前で、正式には市立南中学校。

「うん」

「へー。じゃあ、これから時間ある？」

「え？」

何故に時間？

はっ！そうかあ！

「今から…」

「打ち上げ来なよ！」

「……………」

ん？あれ？

なーんか微妙な雰囲気なのはなんで…？

「望、人の言葉を遮るな」

「え？なんで？」

「はあ…。何でもない。まあそゆことなんで、来る？」

答えを待つ棗。

後ろにいた3人に聞く由宇。

そして…

「言っているんですか？」

「もちろん！」

棗より先に答えて叩かれたのは言うまでもない。

彼等の打ち上げ といっても家で遊ぶだけらしい をする場所は、
ホントは最初に誘おうとした、成瀬 棗という男子の家だった。

私、神山 由宇にとって男子の家は初体験な訳で、緊張があああ！

「神山さん？」

「ふえあ？」

あ、変な声出しちゃった。

と思ったら成瀬くんが吹き出した。

「くくっ……っ悪い。入っていーよ」

うっ…ハズい……。

「お邪魔します…」

私は静かに、その扉の中に入って行っただ。

『おお~~~~~！』

私達は一斉に声を上げた。

「えーっと、じゃあ自己紹介から！」

「全員、南中なら名前と入りたい部活と好きな物みたいなのは？」

「いいね！亮介！」

亮介と呼ばれた彼は“じゃ、俺から”と小さく言って自己紹介を始めた。

「石崎 亮介です！絶対水泳部！んで、好きな事も水泳」

結構、背が高めの石崎くんは160ちょいかな。
髪は茶髪っぽいし、何げにイケメンかも。

「あ、じゃ、俺。成瀬 棗ね。同じく水泳部で好きな事は寝る事と音楽聞くことかな」

さつきも思ったけど、カッコいい。なんて言うか…ジャニーズ系？
背は160…はないか。158くらい？

「はぁーい！次あたし！三森 望！バスケット部希望で好きな人は…秘密」

相変わらずの望は、まだ小さいなあ…。150ちょっとしかないんじゃない…。

髪も茶髪のままでし。

「次だれ？」

ふいに質問が…

「こつ、神山由宇。バレエ部でスパイクが好きかな」

ちなみに私は、155のちょっと高め？髪は長めのストレートです！

「じゃあ私ゝ。泉 笑満捺でゝ、テニス部かなあ？好きな物は特になし」

最近150になったらしい笑満捺はかなりマイペースなんだな。

「俺は…加地 琉衣。両方バスケ」

琉衣も結構カッコいい系。私と背同じだけど。

「ウチは藤木 杏子。杏子いーよ！部活は決まってるけど、好きなのは買い物でーす！」

杏子は私より小さくて笑満捺より大きい。
彼女もまた茶髪。

「ほんじゃ終わった事だし。遊ぶぜ！」

石崎くんの言葉で皆一斉に遊び始めた。
出遅れた私は輪には入りにくくて…。

「おい！俺、メシ買って来るけど、何かいる？」

口々に言いだす皆の注文を、ケータイに打ち込む成瀬くん。

「神山さんは？」

「えっ？私？」

「欲しいモノある？」

「んー…、あ…」

「何？」

「私も一緒に行くよ！」

一瞬、驚いた顔をして

「サンキューー 助かる」

にっこり笑うその顔に、私は一目惚れした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6284c/>

儚く強く

2010年10月30日21時18分発行